

第2回埼玉県総合教育会議議事録

1 開会、閉会の年月日及び時刻

平成27年7月15日(水) 午前 9時30分開会
午前11時30分閉会

2 会議開催の場所

知事公館 大会議室

3 出席した会議の構成員の氏名

○上田清司知事

○埼玉県教育委員会

高木康夫委員長、吉田敬岳委員長職務代理者、藤崎育子委員長職務代理者
志賀周子委員、門井由之委員、関根郁夫教育長

4 構成員以外の出席した者の氏名

○有識者

川野幸夫(株)ヤオコー代表取締役会長

○知事部局の出席者

伊東弘道総合調整幹、関口圭市総合調整幹付主幹、長嶋健一秘書課主幹
五味浩報道長付主査

○教育局の出席者

櫻井郁夫副教育長、柚木博教育総務部長、古川治夫県立学校部長
安原輝彦市町村支援部長、塩野谷孝志教育総務部副部長、高田直芳県立学校部副部長
小澤健史県立学校部副部長、松本浩市町村支援部副部長、吉田正市町村支援部副部長
佐藤裕之総務課長、大根田頼尚教育政策課長、佐藤卓史魅力ある高校づくり課長、
栗原正則総務課報道幹、飯村光良教育政策課副課長、阿部正浩教育政策課副課長、
今井久典教育政策課主幹、佐藤直樹教育政策課主幹

5 会議に付議した事項

(1) 有識者との意見交換

ア 講話

イ 有識者を交えての意見交換

(2) 埼玉教育の針路

6 発言の趣旨及び発言者の氏名

○関根教育長 それでは、時間になりましたので、ただいまから第2回埼玉県総合教育会議を開催いたします。

本日は、報道機関からカメラ撮影の申し込みがありましたので、冒頭の撮影の後、傍聴人に入場していただきます。よろしくお願いいたします。

〔傍聴人入場〕

○関根教育長 はじめに、本日の会議には、有識者として御意見をいただくために、株式会社ヤオコーの代表取締役会長の川野幸夫様をお招きしておりますので、私から御紹介をさせていただきます。

株式会社ヤオコーは、本社を川越に置き、埼玉県を中心に1都6県に広く店舗を展開していきまして、生鮮食品、惣菜をはじめとする食料品並びに家庭用品など住居関連商品の販売を担うスーパーマーケットでございます。

川野会長は小川町の御出身で、昭和44年に入社され、昭和56年代表取締役、昭和60年代表取締役社長を経まして、平成19年から現在の代表取締役会長となられております。

また、川野会長は、平成元年に公益財団法人川野小児医学奨学財団を設立されておきまして、平成20年に食品産業功労賞を受賞、平成21年には本県から渋沢栄一賞の表彰をさせていただきます。さらに平成21年から日本スーパーマーケット協会会長、平成24年から日本チェーンストア協会副会長の職に就かれております。

なお、平成20年から埼玉県立浦和高校の同窓会長として浦和高校の後輩へ大きな応援をいただいております。

本日は、大変お忙しい中、御出席を賜りました。どうぞよろしくお願いいたします。

次に本日の会議の進行についてですが、議事の(1)有識者との意見交換といたしまして、はじめに川野会長様から講話をいただいた後に、川野会長様を交えて意見交換を行い

ます。

次に5分程度の休憩を挟みまして、議事の(2)埼玉教育の針路をテーマといたしまして、第1回会議に続きまして意見交換をいたしたいと存じます。

それでは、議事の進行につきまして、上田知事、よろしく願いいたします。

議 事

(1) 有識者との意見交換

ア 講 話

○上田知事 改めておはようございます。

またヤオコー川野会長にはお忙しい中、御出席いただきまして本当にありがとうございます。

もう御紹介がありましたので、早速会長のほうからお話を聞いて、それを一つのヒントにしながら、また、既存のこれまでの埼玉県のいろんな成果を踏まえた方針について議論をさせていただきたいと思います。

それでは、お願いします。

○川野会長 改めておはようございます。

ただいま御紹介いただきましたヤオコーの川野でございます。

私は子供の育て方とか教育とかいうことについて特別な勉強をしてきたわけではありませんし、まして仕事の忙しさにかまけて自分の子育てや教育も家内任せでございましたので、こういう場でお話をするのは少し躊躇されるわけもございますけれども、たまたまヤオコーが大変元気な企業であるということ、それとヤオコーの社員の皆さん方は、元気に生き生きと働いてくれているということで、ヤオコーのことについてお話をすることが私のまずの役目かなと思ひまして、ヤオコーのことについてお話を申し上げたいと思います。

企業経営の資源というのは人・物・金、そして情報と言われますけれども、物や金や情報は人が作ったり、人についてくるものですから、経営の資源というのは人、まさに人・人・人、そして人なんです。企業の発展だとか、あるいは成長というのは人によってもたらされるものですから、人材の育成ほど企業にとって大切なものはないと思います。人材育成こそすべてだと言っても過言ではないかと思ひます。特にヤオコーのような小売業というのは、労働集約型の産業でございますので、人の働きによってその成績が大きく左右されてしまいます。

10年ほど前からヤオコーは日本一元気な食品スーパー企業と言われております。毎年、

毎年、増収、増益の記録を伸ばし続けていること、あるいは新しい売り場や店づくりに積極的にチャレンジをして、日本の食品スーパーマーケット企業の目標になっていることなどが評価されているからだと思いますが、その元気さを作ってくれているのが当社のメンバーさん。社員さん、パートさんのことを私どもはパートナーさんと言っているのですが、あとアルバイトさん、いわゆる私どもの商いに関わっているすべての皆さん方をメンバーさんと言っているのですが、私はメンバーさんが日本一元気に働いてくれているからだと思います。そしてメンバーさんの日本一元気な働きを後ろから支えているもの、あるいは引き出しているものが大きく2つあるのだと思います。いわゆる人づくりの基本になっているものです。

まず第1は、志の高い企業哲学や理念を経営のバックボーンとしていること。また、それを持ち続けていることです。2つ目は、どんなスーパーマーケットになるかという商いのコンセプトを明確にしている、つまり何屋になるかをはっきりさせていること、また社員が目標として進むべき方向がはっきりしているということだと思います。

まず私どもの哲学とか理念について少しお話を申し上げたいと思います。

ヤオコーの明文化されている基本理念というのは、「生活者の日常の消費生活をより豊かにすることによって、地域文化の向上・発展に寄与する」ということをございます。スーパーマーケットの仕事を通して世の中のお役に立とう、地域の方々に、近くにヤオコーの店があつて良かったと思っただけのような店を作っていこうということでありまして、売ればよい、あるいは儲かればよいということではありません。もちろん売れたり儲かったりしなければ企業として存続できませんが、そのことは目的ではないですね。そして私たちの目的としているのは、人々の生活の豊かさを実現するということをございます。それがヤオコーという企業の存在する意味であり、目的をございます。

小売業に限りませんが、特に小売業は、変化適応業をございます。お客様のニーズの変化に合わせて、あるいは変化を主導するような形で提供する商品やサービスを変えていきます。しかし、企業には変わらないもの、あるいは変えてはいけないものがあります。それが企業の哲学であり理念だろうと私は思っております。

長い間、確実に発展する会社とか、寿命の長い会社というのは、志の高い哲学とか理念を経営のバックボーンとしてしっかり持っており、一本筋が通っているのだと思います。当社では多くのメンバーさんが私どもの基本理念を理解し、行動の原点、あるいは指針にしてくれていると考えております。

次に商いのコンセプトについてお話を申し上げたいと思います。

日本には「十人十色」という言葉がございますけれども、生活を色に例えますと、私が幼いころの日本人の生活というものは十人一色であったように思います。その後、生活が多様化し、個性化し、高度化したことで十人十色となり、さらにしばらく前からは、十人十色の中で一人十色の生活をする時代になっているのだと思います。ですから、小売業にとっては、何でもあれば売れたという時代はとうに過ぎ去っております。物が無い時代には正しかった総合スーパーの戦略も、物があり余っている今の時代には戦略転換を迫られている。多くの総合スーパーは潰れてしまいましたし、今残っているところも、総合スーパーとしての成績は大変悪いですね。全然浮上してまいりません。うちには青も、赤も、黄色もありますよと言ってみても、赤の生活を充実させたい人にとっては、青や黄色はかえって邪魔な色なのですね。ですから、ピンクに近い赤はうちに来てくださいというようにはっきりさせていかないと、お客様から支持されない時代になりました。お客様のどの生活シーンを狙った商売をするのか、どの色をターゲットにした商売にするのかを明確にしなければならぬ時代に相当前からなっておるわけでございます。何となく商品を集めたよろず屋は支持されなくなり、小売業でも専門店化を要求される時代が相当前から来ております。ですから、商いのコンセプトを明確にして、自分の専門をはっきりさせながら、その専門を追求していくということが小売業にとっては大変大切でございます。

ヤオコーは、同業者からぶれないという評価をいただいておりますが、それは経営理念がぶれないことに加えて、追求している商いのコンセプト、私どもは豊かで楽しい食生活提案型のスーパーマーケットという言い方をしておりますけれども、そのコンセプトはぶれないということでございます。

第1回目のこの会議で上田知事が話された埼玉の教育の針路における不易の部分だと思っております。志の高い理念の実現こそ私たちの目的であり、その実現のために豊かで楽しい食生活提案型のスーパーマーケットの充実を目標に皆で頑張っておるということでございます。

そして企業にとって、その企業哲学が、あるいは経営哲学が大切なように、私たち一人ひとりの個人にとってもその生き方を決める人生の哲学が大切であると思っております。若い時から、生きるとは何か、いかに生きていくことがよいのか、あるいは人生の目的は何かと考える。その手がかりとしてのリベラルアーツ等を身に付けながら、高い志を持った人間に育てることが私は大変大切だと思っております。

さらに自らの人生の目的を実現するための専門家、プロとしての道を進むための指導とかアドバイスが教育にとって大変大切なことだと思います。自分は将来何になるのか、何をしたいのか。しっかり考えさせることが大変重要だと思います。今の日本のように何となく大学に行ったのでは本人のためにもなりませんし、もったいない青春の過ごし方だと思います。

後に少しお話をしますが、これからますますグローバル化が進展をしていきます。いわゆる企業のグローバルの中での自分たちの生き方をしっかりと模索をしていかななくてはならないのですけれども、これから私たち日本人も、グローバルの中でどう生きていくのかということを考えなくてはならないわけですので、何となくというのは、少なくとも日本の中でももちろんですけれども、グローバルでももう通用しないという時代になってくるのではないかと思います。

時間の関係もございますので、私どもの商いについても詳しい話は残念ながらできませんが、私どもの商いをより充実させるための方針を2つだけお話を申し上げます。

まず第1は個店経営ということでございます。先ほど申し上げましたように、お客様のニーズがますます多様化し、個性化し、高度化しております。ですから、お店ごとにお客様のニーズが微妙に違います。単純に考えましても、若い人たちがたくさん住んでいる町と、年配の方がたくさん住んでいる町の店ではお客様のニーズがそれぞれ違うことをおわかりいただけたと思います。そしてその違いをよくわかっているのはお店の人たちですから、お店の人たちに、自分たちのお客様にはこんな商売をしたいと思ったことをしてもらえば、地域のお客様のニーズに合った商売ができるわけでございます。ですから、できるだけ各お店に商売の主体性を持たせる努力をしております。私どもはこれを個店経営と呼んでおります。私は本部をサポートセンターと呼んでおるのですけれども、もちろん本部は本部としての役割、あるいは本部にしかできないことがございますので、それはしっかりとしている。つまり商いの主体性をお店に持たせながら、お店と本部が役割分担をし、ヤオコーの商いをしているということでございます。行政で言いますと地方分権といった方がいいかと思います。

話は少しそれますが、日本が改めて元気を取り戻すためには、統治機構を地方分権に変えていくしかないと思っております。

このように私たちはお店に商いの主体性を持たせております。それも店長1人でやるのではなくて全員でやろうと考えております。当社では大きいお店でパートナーさんやアル

バイトさんを含めて300名ぐらい、小さな店でも100名ぐらいが働いてくれております。日本には「三人寄れば文殊の知恵」という言葉がございます。私はこれを文字って、「百人寄れば文殊の知恵」と言っております。当社ではパートの方をパートナーさんと呼んでおりますが、パートナーさんのほとんどは主婦でございますから、食事という生活シーンづくりの家庭における主役でございます。もともと食事という生活シーンづくりについての知恵や知識や経験は豊富です。だからこそそれぞれのお店のお客様のニーズがよくわかっておりますし、しかもほとんどの方がコミュニティの住民ですので、地域の情報にも大変詳しいわけです。そんなパートナーさんたちが持っている潜在的な力をお店で存分に発揮してもらおうと思っております、それらのパートナーさんたちに、さらに教育や、研修や、技術訓練をしたり、情報を伝えたりしながら仕事をお任せをして、経験を積んでいただいてキャリアアップを図る努力をしております。

申し上げるまでもなく、日本の女性は大変優秀ですし、しかも多くの方は活かされたいと思っております。当社の元気のよさは、パートナーさんの働きによるところが相当大きいと思っております。私は当社のパートナーさんは、スーパーマーケット業界においては日本一だと自負をしております。このように全員が商売に参画をすることで、店長を中心にみんなが力を合わせてチームとして個店経営を実現したいと考えているわけでございます。

小売業で働く一番の楽しさは、自分がやったことにお客様の反応が返ってくることです。私どもはパートナーさんにも、アルバイトさんにも、その楽しさを味わっていただきたいと考えております。さらに働く喜びというのは、命令や統制によるマネジメントでは生まれません。みずからの意思で仕事をした時に得られるのが働く喜びであり、仕事の楽しさですので、そういう意味からも、全員参加の商売に参画をしていただいております。

個店経営をすることでお客様のニーズにお応えしやすくなり、しかも全員参加の商売をすることで社員は考える力を身に付け、経験を積み、キャリアアップを図って、人材として育ってまいります。これからますます厳しい競争時代を迎えますが、ああやれ、こうやれという本部指導型のマネジメントと、私どものような個店経営で、しかも皆で考えてもらう全員参加型のマネジメントでは人の育ち方が違うはずでございますので、時間の経過とともに、その実力の差が出てくると考えております。

これからの時代はいろんな面で大きな変化が起こるでしょうし、世の中はますます複雑

になってくるはずでございます。これという決まった答えがなかなか見つからない時代になっているのだと思いますし、これからますますそういう時代なんだと思います。

ですから、考える力を身に付ける教育が大切だと思います。さらに私たちは自分のできることが少しずつ多くなる、あるいは自分の能力が少しずつ高まっているということを実感できることは大変大きな喜びでございますので、そのような育て方をするということは大変大切なことだと思います。

先ほども申し上げましたけれども、教育問題について特別な勉強をしている私ではありませんし、自分の子供の教育すら家内に任せておりましたので、生意気なことを申し上げるわけにいかないのですけれども、一般の日本人として、あるいは子供や孫の成長を期待する父親、あるいは祖父として日頃考えていることを少しアットランダムにお話を申し上げたいと思います。

「幼稚園では遅すぎる」という本がございます。これはソニー創業者の井深さんがお書きになった本でございます。相当前の本でございますけれども、今も再販されておる本でございます。日本には「三つ子の魂百までも」という言葉がございますが、子供は3歳までにその性格だとか能力が大きく決まってしまうと言われております。ある意味では、皆で寄ってたかってと言ったらいいですか、脳を刺激してあげたり、良いこと、あるいは悪いことを判断できるような育て方と言ったらいいのですか、そういうことを教えてあげることが小さい時に大変大切なことだと私自身思っております。これは主に親が、あるいは家庭が責任を持つことではございますが、お母さんが働きに出る時代でございますし、そう考えますと、保育園等での教育も大変大切になってくるのだろうと思います。

義務教育では、いわゆる「読み、書き、そろばん」をはじめとして現実の社会に出ていくために必要なことをしっかりと教えていくこと、そしていわゆる勉強だけでなく、社会性だとか道徳まで含めまして人の道をわからせるということは大変大切だと思います。そうして中学から高校にかけては、自ら歩むべきこれからの進路について考えたり、あるいは考えさせるということは大変大切だと思います。

先ほど申し上げましたように、人々の生活が多様化したり、個性化したり、高度化して、世の中が複雑になればなるほど、職業人としてもプロの能力や腕前が要求されてまいります。稼ぐ力を身に付けないと生きていけないわけでございますので、そういう点でも何となく大学へ行くというのではなくて、やはり自分の進むべき方向を、後で方向が変わるの

はいいのですけれども、まず考えさせるための教育をしていく、指導をしていくということが大変大切なことだと思います。

さっき御紹介いただきましたように、私は現在、県立浦和高等学校の同窓会の会長を仰せつかっております。浦高では、卒業式の前日に、卒業生全員に集まっていただいて同窓会入会式という会合をもたせていただいております。その席で会長から歓迎の言葉をお伝えするわけですが、私が必ず話しかけることの中で、今日は2つお話を申し上げたいと思います。

まずは英語でコミュニケーションがとれるようになってくださいということです。ますますグローバル化する世の中で、世界の共通語は英語でございますので、英語でコミュニケーションがとれないようでは話になりません。日本、あるいは日本人が世界の中で生きていくことができなくなってしまうと思います。

2つ目は付加価値を高めたり、あるいは産み出したりできる人材になれるように努力をしてくださいということでございます。グローバル化が進めば進むほど、すべての物の値段はグローバルスタンダードに収斂をされていきます。労働の対価としての賃金も同じでございます。発展途上国の肉体労働を中心としたワーカーの働きしかできなければ、その人たちと同じような賃金しか得られません。付加価値を高められるような仕事のできる人材にならないければ将来は大変なことになると思います。ましてディープな高齢化社会の日本でございますので、高度な経済成長は望めませんし、世界一大きな借金国でございます。この借金は私はインフレによって返すしか返せないなと思います。ですから親の財産はもちろんあてにできませんし、国もあてにできないということでございます。現在、ギリシャが大きな問題になっておりますけれども、ギリシャのことを笑ってられないのが現在の私たちでないかなと真剣に考えるべきだと思っております。

ですから、一人ひとりが自立していくしかない。自分で稼ぐ力を身に付けるしかないのだと思っております。そのためにも人間力、特にまずはリベラルアーツでの教養を身に付ける。そして問題を見つけたり、課題を解決するいわば考える力を身につける努力をしてくださいという話をしているのですけれども、まさにそうだと思います。

このように考える力を高めるための教育をお願いをしたいと思っております。用意された答えを教える教育というのはもう今の時代は必要ない、ある時期まででいいのだと思います。これから日本人が一人ひとり元気で生きていくためには、考える力を身に付けさせるということは大切ですし、そのことによって個人が稼ぐ力を身に付け、そのことで日本の国を

強くすることであろうと思います。

大変生意気なことを申し上げましたけれども、以上で私の話を終わりにさせていただきます。

ありがとうございました。

○上田知事 ありがとうございました。

拍手をしたいところなんです、オーバーになってしまいますので。とてもいい話をお伺いしました。企業も最終的には人だということもありますし、教育もいかに人材を育てるかというのが一番の目的でありますので、共通するお話だったと思っております。

イ 有識者を交えての意見交換

○上田知事 それでは、早速ですが、川野会長も含めて、川野会長のお話しされた部分についてそれぞれ意見交換をさせていただければと思っています。

幾つか絞ったほうが話しやすいかなと思っていますので、座長の立場で勝手に少し絞らせていただければと思っています。

例えば企業理念、そういうのと、例えば埼玉の教育理念、その部分をどうきちっと位置付けるかということについて、どうしても文科省も含めて、だらだらと長い文章で全部含めてしまっていますのではっきりしなくなってしまう。そういう意味で、クリアな、まさに志の高い人材を生み出すための公教育とは一体何なのだという部分を少し意見交換したらいかがかなと思っています。

その後、しならばそれを実現するための手段としてのコンセプトは一体何なのだろうというようなことを考えていけば、今、川野会長の言われたお話と連動していくのではないかと考えていますので、埼玉県公教育、とりわけ埼玉県教育委員会としては高校教育が中心であります、しかし、市町村との連携の中でも、当然小中学校の教育に対しても、私たちが考えるのはお伝えしていく、また市町村との意見交換という点において、出している取組を考えていますので、権限はありませんが、全体的に提示することは可能だと思っていますので、その辺を意見交換したらいいかなと思います。いかがでしょうか。

○高木委員長 どうもありがとうございました。

今、話を伺ってしまして、私は民間人でありますので、非常に共通に感じたところがあ

なのですが、ヤオコーさんでのスタッフをパートナーさんということで、さんづけにされて、非常に人を大事にされているなという印象を受けました。

その中で、お話の中にもありましたとおり、とにかく人が大事なんだよと、それから人をいかに育てるかということも強く感じたのですが、資料にもありますように、いろんな分野において子供たちを大事にしながら育てていこうということを今取り組んでいるところなんです、なかなか子供たちというのは難しいところが1点だけありまして、小さい頃から、お話の中にもありましたように、将来の夢を持つ子供が、昔から比べたら随分減ってきたのではないかなという気がしております。高校教育においても、いろんな体験をさせながら、将来に向かって夢を育ててほしいということでやっているのですけれども、先ほど出たように、「三つ子の魂百までも」ではないのですが、小さい時から夢をどうやって、保護者も含めて、子供に与えていくか。企業の経営とは違うところかもしれませんが、その辺をぜひ御示唆をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○川野会長 なかなか難しいですね。例えば自分のことを考えてみますと、私は八百幸という商家の長男として生まれまして、家を継ぐことを期待されながら大きくなったのですが、当時はお店と住まいが一緒ですから、父や母の働きぶりを見ながら大きくなったのですが、その時は商人になりたいなんてとても思わなかったのです。父や母はぺこぺこおじきばかりしてしまっていて、何となく卑屈に思いましたし、市場だとか、あるいは問屋さんから商品を買ってきてお店に並べるだけで大きな意味のある仕事なのかなというふうにしたので、生意気盛りの時はそう思いました。

ただ、私が大学に入る前の年の12月に親父が亡くなりまして、入った年に、ちょうど八百幸が当時としては本格的にスーパーマーケットになりました。母1人で頑張っているものですから、私は母の期待に応えられないで別の方向へ進みたいと、何とか母を口説いて、納得をしていただいて大学に行ったものですから、少し勉強したのです。小売業についての勉強、スーパーマーケットの業界なり、小売業の業界の情報を集めて母に伝えたいというふうに、それが私のできる手助けだと思って勉強したのです。そうしたら私の思っている小売業とは小売業が違っていて、やはり世の中のお役に立つ大変大切な役割を持っている、そんな業態だということをしてそこで勉強してわかったのです。

ですから、現在の私があるわけでございますけれども、それまでは、私は世の中にお役に立つ人間になりたいなと思って、大学は法学部へ入ったのは、社会派の弁護士になって、困っている人を助けてあげたいということです。それは高等学校の時にそういうふうに思

いました。ですから、そう思って大学は法学部へ入ったのですけれども、大学に入って小売業の大切な役割をわかって、それで小売業に方向転換をしたのですね。

ですから、私がなぜ社会派の弁護士になろうと思ったのか、小売業は世の中のお役に立つことだから男が一生かけるに値する仕事だと思ったかということについては自分でもわからないのです。でも実際そう思ったことは事実でございまして、今の高木さんの質問の答えにはならないのですけれども、小さい時から、そういう思いを持ちながら生きてきたのかなというような気はいたします。どこかでどういうふうに自分の思いが、あるいは考え方が固まってきたか、どういう思想が影響を受けたかということについてはよくわかりません。

ただ、具体的に私がわからないのですけれども、例えば高校へ入った時に、ただ単にいわゆる学校の勉強をするだけでなく、例えば小説をたくさん読んだり、さっきリベラルアーツという話をしましたけれども、そんなこともやはり私の生き方を決めていく上で大きな意味を持ってきていたんだと、今から思うとそういうことなんですね。それがより具体的にと言ったらいいのですか、より明確に教育の中で学ばせるといったらいいですか、そういうことができればいいかななんて思うのですけれども。

○上田知事 一番大事なことは志を立てることがスタートですよ。どういう時に志が立ちやすいかということ、欠けた部分があった時が立ちやすいのですよね。例えば親が病気になって、それこそ徳田虎雄さんではないですが、妹さんでしたか弟さんが病気になって、どんなにお医者さんを叩いても来てくれなかった。亡くなった。それがあつたら、どんな救命救急も24時間絶対断らない。それが彼の志になって、奥さんにも、子供達にも伝わり、徳洲会というああいう独自の事件は起きましたけれども、欠けたものがあったりすると、私は中学3年の時に担任の先生を見ていて、大きい不良の子供を怒らないで、弱そうなたまらないことでは怒っている。それで見て、だらしのない先生だと思ったので、私だったら不良でも、ある程度まともに話して口説いたり、ナイフを取り上げたり、たばこを取り上げたりしていたし、私だったらいい教師になれると思って、欠けたものを見た時に自分の志が立ったのですね。

やはり何か足りないもの、満足をしている状況の時にはなかなか志を立てにくいと思っています。何か足りない、不足している、そういう時に人間はこれをカバーしなくてはという時に、それは実際の生活の中で感じる時もあるし、偉人伝を読んだり、あるいは何かの小説の中で啓発を受けたり、しかし、どこかに何か違う場面での何か欠けたものを見

たり感じたりする、ただ、今の非常に満足された家の中で、お母さんが苦勞しているな、お父さん苦勞しているなというのが余り見えない。お父さんは実は苦勞しているはずなんです。外で。お母さんもどこかで苦勞されているはずなんです、それが見えにくい、それこそ井戸水をバケツで汲んでちょっとでも運んであげれば「ありがとう」と言ってくれる。その「ありがとう」を聞きたいためにお手伝いをする。そういう部分を人為的にある程度作らないと難しいのかなと思っています。

例えばボーイスカウトならボーイスカウト、ガールスカウトなんというのは、そういう欠けた空間に行って、そこで学びをする場面があると思います。それこそ野球のチームは9対9に18人ぐらいいなければいけないのですが、まだ9人ぐらしか集まらない時には三角ベースで我々はスタートして、戦力も上級生が適当に分けてくれて、兼任もしたりしながらやはり欠けているのです。欠けているから知恵が出るのですよ。そういう志を立てるには、ある程度欠けた部分が必要だと思っています。満足された社会の中ではなかなか志が立ちにくいと思っていますので、時と場合によっては人為的に欠ける部分を作らないといけないのではないかなと思っています。

多分会長のお話の中にも感じたのですけれども、お母さんがすごく御苦勞されている。その姿を見ると何かしてあげなくてはならない。でも自分は社会派の弁護士にならなくてはいけません。そういう志も立てている。でも、こちらも少しぐらい手伝ってあげるかという、やはり欠けている部分です。何かやはり志を立てるのはまさに企業理念ですが、教育の中で一番大事なのは、みんなが志を立てられるかどうかです。何のために生きているかという意味での志。

○川野会長 今の時代に限らず、昔から年配者は「今の若いものは……」という話をしているそうです。ヤオコーは正直、私が入った時は年商が2億円ぐらいでしたから、今は3000億円ですから大きくなってきたのです。私が入ったころはとても新卒の学生さんは採用できなくて、中途採用の方を職安から採用させていただいて、その後少しずつ大卒の方をはじめとして学卒の人に入らせていただいていたのです。その時に、昭和50年代のはじめから10年間ぐらいは1対1で私は学生さんにお話をしました。私のところの人事の社員、そんなに企業は大きくないので、普段は事務の仕事をしているのですけれども、採用の時期に採用の担当になるのです。採用担当の社員に、とにかく私のところに学生さんを連れてきてくれということで、一番多い年では200人ぐらい、1人に1時間から2時間ぐらいかけて、いわゆる口説いたのです。その時に話をしたことは、やはりスー

パーマーケットという仕事の役割だとか、これからはヤオコーはこうなっていくんだとか、あるいは人々のためにこういうことを私はやっていきたいので一緒にやろうではないかというようなことなんです。そういうことに、若い人が、大きな夢というのはまた別なんでしょうけれども、そういうことにかえって共鳴をしてくれるのですね。私は、お互い人間だと思うのですけれども、人々のために頑張ろうという、私はそういう人生を生きたいのであなたと一緒に手助けをしてくれよという話に共感してくれるんです。それこそ売上高規模が20億円ぐらいの時から大卒の人たちが入ってくれておりますので、いつ潰れても仕方がないような企業だったわけですがけれども、そのように私に口説かれて入った社員がたくさんいて、その人たちが現在のヤオコーの幹部として企業を支えてくれているのです。企業が大きくなっても同じだと思うのですけれども、やっぱり、今の若い人たちが、例えば志が高くないのか、あるいは高い志を求めておられないかということ、そんなことはなくて、求めておられるのだと思うのです。

ですから、その求めておられる心をやはりどれだけ揺すぶるか、あるいはその求めておられる心に沿ったようなあり方をそれぞれの企業がどうしていくかということが私は大切なことだと思いますね。

○上田知事 どうぞ何か。

○藤崎委員 私は不登校の子供の家庭訪問というのを長年やっております、教育の上でその子が将来、自分で稼いで生きていけるようになるということはもちろん大事だということでこの仕事をしています。そのために学校が子供たちにとってどんなところになればいいのかということを常に考えています。今日の川野会長さんの、ぶれないことが大切だというお話をお聞きして、今、学校の中で、先生方はもともとは志を持って教師になったものの、学校現場の中でぶれるということも生じ、この前の岩手のいじめ事件がありましたけれども、教師がいかに子供を守り育てるか、十人十色の子供たちを預かっている学校を、どうより良くしていけばいいのかと考えていました。ヤオコーにおいて、私自身関心を持ったのは、店長をどのように教育していくのか、あるいはパートナーさんですか、バイトさんの研修をどのようにされているのか、どんなに志が高い人が集まっても、人間関係が良くなければいい仕事にはならないと思うのです。是非そういった点で、どのように研修を行っていらっしゃるのか教えていただきたいと思います。

○川野会長 大きなことは言えないのですけれども、先ほどからもお話を申し上げておりますように、やはり基本的な理念というか、考え方が大切です。私どもの考え方の基本に

なっているのは、母からもずっとつながっているのですけれども、人間は一人で生きているわけではない。多くの方のおかげさまで生きている、生かされている。だからこそ自分が「おかげさまで」と言われるような生き方をするとすることは人間的な生き方ですし、自分の人生をより充実させることなんだ。働くというのは人生の一場面だから「おかげさまで」と言われるような働きを私たちはしていこうではないかということです。

人間は嫌われるより好かれるほうが、あるいは叱られるより褒められるほうが、軽蔑されるより尊敬されるほうが嬉しいし楽しい。「おかげさまで」と言われるような働き方というのは、やはり好かれたり、褒められたり、尊敬されたりする働き方だから楽しい、あるいは嬉しい働き方なんだから、そんな働き方をしようではないかということ、社員に言い続けていることなんです。これは言い続けると駄目なんだと私は思います。だからきつとうちの社員から見ると、また会長は同じことを言っているというふうに、それこそ耳にタコができるほど言われ続けているのだと思います。でもそのことはまず大切だと思います。そしてやはりそのことをよく理解していただくための機会をいろんな場で持つということだと思います。

大変恥ずかしい話なんですけれども、まだヤオコーでも挨拶が十分にできない社員がたくさんいるのです。特に本部の連中が駄目なんです。お店へ行った時に、パートナーさんやアルバイトの人に自分から声をかけて「おはようございます」、「こんにちは」、「ご苦労さまです」となかなか言えない人がいるのです。それは自分の担当の部門の人には声を掛けるのです。でもそうでない人に対してはなかなか声をかけない人が何人かですけれどもいるのです。そんなマナーがまだまだできてない会社なんですけれども、そういうことを一つ一つ注意をしていくということが大変大切だと思います。挨拶というのは相手の人格を認める第一歩ですから、挨拶ができないというのは、さっきお話したように、「おかげさまで」というのがわかってないという具体的な証拠なんです。でもそういうことを一つ一つチェックをして、そしてその都度注意をしてあげることが大切だと思います。

それと私たちの基本的な哲学だけではなくて、商いのことについても、それは十分わかっている店長と、少ししかわかってない店長と、よくわかってない店長と、極端に言えばいるのです。だから自分たちの目標について、自分がわかっていなければ、部下になかなか指導もできませんし、指示ができません。そういう人が中にはいるのです。そういう状況ですから、店長塾というのがございまして、そしてリーダーになる店長を何人も決めまして、そこのお店に他の店の店長が勉強に行くのです。そしてそのお店がこんな売り場を

作っているとか、こんなお客様に対する対応をしているということを見てもらって、なぜこういう売場ができていいのか、なぜこういう対応ができるのかということについて自分で考えてもらう。そして、わからなければ、リーダーの店長に聞いてもらって、そこでこういうことなんだということをして、具体的な事例の中でわかってもらうというふうなことをしております。これは店長塾に限らず、例えばバイヤーとって商品の仕入れをする担当がいるのですけれども、バイヤーの塾もありまして、スーパーバイザーの塾もあって、よくわかっている人とわかってない人がいるものですから、よくわかっている人によくわからない人が仲間同士で指導していただくということをやっております。

○吉田委員 今、会長のお話をお伺いして、知事も埼玉の教育でというような場で考える時に、私はいただいた御示唆というのは、例えば仕事を通して社会の人の役に立つというようなこと、ここら辺が自分の生き方、生き様を通して社会の役に立つ、あるいは自分の役割を果たせるようになるために学ぶのだといったところが一つあるのかなということをお自分なりに受け取らせていただきました。同時に、それを実現するためのコンセプトというものは、会長のお話の中に度々出てきました自分で考えることができる、いろんなことに対して指示されてという中で、自分で考えることができる、そういう人を育てるといふ、そんなふうにお受け取らせていただいたのですけれども、失礼ながら会長の年配、私どもの世代もそうだったのですけれども、教育というのはほとんど上から、あるいは先生から教え込まれてという中で育ってきた、そういう中で会長御自身が自分で考える場面といふのはいろいろおありになったと思うのですけれども、1つ、2つ、こんなことがあつてというようなこと、あるいはこれがきっかけでというようなことを教えていただけたら嬉しいなと思っております。

○川野会長 先ほどちょっと申し上げましたように、私は大学は法学部へ入ったのですね。文科系の皆さん、私だけではないと思うのですけれども、理科系に比べて文科系は比較的時間的な余裕があるのですね。高校時代、私は下宿していたのですけれども、下宿屋さんの筑摩書房の日本文学全集というので1巻から60巻ぐらいまで高校時代読んだとか、大学へ入っても、例えば法律の勉強はあんまり好きではなくて、例えば歴史だとか、哲学だとか、そんなものを自分で勉強とって、計画的な、あるいは系統的な勉強をしたわけではなくて、アットランダムに本を読んで、そんな中で自分の将来進むべき道といたらいいか、そんなものが少しずつ醸成されてきたのであろうなと思っております。

ですから、ただ単に学校で教えていただくような勉強といたらいいか、それは

今まではそれこそ答えがある問題を出されるわけですけども、世の中に出ると答えのない問題ばかりですから、そういう意味では、自分で考える土壌みたいなものは少しはそういう中でもあったのかもしれない。

世の中に出ましたら、私は八百幸へ入って、本当に八百幸は小さかったですから、自分が先頭になって全てのことをやらなくてはいけないのですね。中小企業は、銀行からお金を借りる時に連帯保証を個人がしますから、万が一会社が駄目になって、会社といっても家業ですけども、家業が駄目になったら夜逃げするしかないのです。そうすると、とにかく徳俵に足をかけても前へ出なくてはいけないということがありましたから、自然に考えざるを得なかったのだ、そういう環境の中に置かれてきたのだと思うのですね。

だからさっき知事がおっしゃったように、何か欠けているものとか、大変なことがないとなかなかそういうことにはならないかなというふうに思いますけれども、だから、かえって今の若い人たちはある意味では不幸なのかなという気がしなくもありません。でも教育そのものも答えがあって問題を出すのではなくて、いわゆる教えるということではなくて、先生も一緒に学んでいくといったらいいですか。あるいは答えを出していくための手助けをしていく、だから答えは1から10まであっていいと思うのですけれども、そういう教育の仕方をしていくことが私は大切だと思う。

例えばスカンディナヴィア3国ですか、スウェーデンだとか、デンマークだとか、フィンランドですか、そういうふうな教育をなさっていると少しだけ聞いたこともあるのですけれども、昔の工業化社会の人の育て方というのは、答えがあって、それで平均的な人間を作っていくことが良かったのだと思うのですけれども、それではいけないのではないかな。

よく大前研一さんが「尖った人間をつくれ」と言いますが、尖った人間を作っていくことは大切なんではないですか。そのためにはやはり考えることをさせないといけないと思うのです。その方法はということなのかというのは、私はわかりませんが、私の例で言うと、とにかく前へ進まざるを得ない。そうするとやはり自分で考えて自分でいわゆる解決策を見つけていかないとできないのです。それがやはり自分の習性になってきたのだというふうには思います。

○吉田委員 会長がそういう知事が言われるところの欠けたる状態に直面した時の出てきた力というのが、ずっと例えばバケツに1滴1滴たまるような感じで読書をされていた、そういうものが、いざそういう状況になった時には、ばあっと力となって出てきたという

ようなことなんでしょうか。

○川野会長 ばあっと出たわけではないですけども、じわりじわりだと思います。もう私にその力は本当にはないですから、もう若い連中ですね、今、息子が社長をしているのですけれども、若い連中に任せて、息子が働きやすい環境をどう作るかということが私の役割だと思っています。

○上田知事 店舗に入ると、小さなごみでもぽっと拾っていらっしゃいますよ。あれにはびっくりしました。

○川野会長 それはさっきの話ではないですけども、やはり社員にわかっていただくのは、口で言うより行動のほうがいいのですね。いろいろお話を聞きますと、先生方はものすごく忙し過ぎるようですね。私はさっきお話したように、浦高の同窓会の会長をさせていただいて、浦高の先生方の様子をよく聞くのですけれども、特に浦高なんかは、それこそサービス残業もいいところですね。よほど志を高く持ってないと学校の先生は務まらないのではないかな。それを少しでも楽にしてあげるとするのは、県にしても大切なのではないかなと思いますよ。

○上田知事 私はいつも言っているのですけれども、ガイドブックだとかマニュアル本だとか、あんまり作るなど言っているのです。そういうのを作ると読まなくてはいけないから忙しくなると。そういうのは出さなくたって大丈夫だと思うのですけれども、何か文科省的にはそういうものばかりがどんどん届くのですよね。それをまた撒き物を作って埼玉版をまた届けるというのが、そういうのが多いですね。

○川野会長 教育というのは地方分権はないのですか。

○上田知事 基本的には地方分権だよ。

○関根教育長 基本的に校長はかなりの部分ができますので。

○川野会長 さっきお話したように、これから難しい時代ですから、教育においても地方分権になっていくべきだなと思いますよね。

それから、統治機構を変えていかないと日本の国は駄目になっていくのではないかなと生意気なようですけども思います。例えば埼玉県教育の方針が、それは埼玉県の中ではきちっと活かされて、主体的に出されて活かされていくということは大変大切なのではないですか。それぞれ違う教育をしていいと思うのです。読み、書き、そろばんは駄目ですけどね、もちろんね。

それと先ほどの店長の話ですけども、やはり組織はリーダーによって決まります。店

も店長の能力によって成績は大きく左右されます。ですから店長の教育というのは、私どもにとって人材育成の中では一番大切なことですね。例えば学校でも校長先生とか、教頭先生の教育といったらいいですか、人材としても、いわゆる育成というのですか、それは大変大切なことだと思いますね。

○上田知事 生命保険会社で、ある支店長さんが、必ずその人が行ったところは日本一になる。契約が。メンバーは足りないんですよ。それぞれの小さな支店、埼玉県だったら埼玉県の全体の3分の1ぐらいを受け持った支店長というのですか、支社長、その方が行ったら一番になる、3年ぐらいいたら、その前の所でもそうだった、その前の所でもそうだった、必ずその人が行くが一番なんです。何が違うのでしょうかと言うと、私のある先輩が川越に住む人だから、会ってくれと、東京都の駅に新幹線に見送りに行ったら、ホームは埋め尽くされているから、何なんだろうと思ったら、その人を見送りにきていた。とにかくすごいなとって、聞いたらすべての支店の方々の名前と顔をあつという間に覚える努力をしていたそうです。何とかさん、何とかさん、何とかさんと言って声を掛けたら、みんなびっくり仰天して、何で知っているのだろうと。やはりそれから、その人のためだったら少し頑張らなければということで思ってくるらしくて、それ以外にいろんな要素があるのでしょうかけれども、私に話されたのは、とにかく知っている自分の事をと、ただ名前だけでなく、その他についてもちゃんと知っている、趣味だとかそこまで。だから認める努力をしていらっしゃる。まさに挨拶は人格を認める第一歩というお話ですけども、認められたら、認め返したりというような、そういう反作用が起きるのでしょうかね。

先ほどの会長のお話の中でも出てきたのは、やはり藤崎委員も、不登校の関係でいろいろ御苦勞をされている。多分押し付け方式ではなくて、寄り添って一緒に考えてあげていらっしゃるので成功されていると思うのですけれども、何か教えながら一緒に学ぶという、そういうものが教師の人格の中にあると伝わるのではないかなという気がしますね。

○川野会長 学校の教育はわかりませんが、企業における人材育成の、もちろんまず第一は、相手の人格をしっかりと認めてあげることなんですけれども、任せるということはものすごく大切だと思いますね。

○上田知事 予定された会長の束縛している時間というか、拘束している時間が近付いたというか若干超えました。まだまだ、お聞きしたいことがたくさんあるかと思いますが、このとおりに忙しく多方面にわたって活動なさっておられる川野会長でございますので、一

且所定の時間がきましたので、どうしても聞きたいということがありましたら、よろしいですか。

それでは、会長ありがとうございました。

○川野会長 どうもありがとうございました。

○上田知事 企業も、あるいは学校現場も同じかなと思いました。

これからもまた折りに触れて機会があればと思っておりますので、お力添えの程、よろしく申し上げます。

今日はありがとうございました。

○川野会長 どうもありがとうございます。(拍手)

○上田知事 では5分間休憩ということでよろしいですか。

[暫時休憩]

(2) 埼玉県教育の針路

○上田知事 それでは再開をさせていただきます。

ちょうど川野会長のお話とつながると思うのですが、志の高い企業理念、バックボーン、あるいは商いのコンセプト、これとほとんどつながってくると思いますが、埼玉教育の針路ということについて闊達な意見交換をさせていただければと思います。

この部分に関して、教育長のほうから特に問題提起なり何かあるのでしょうか。

○関根教育長 前回、知事から資料の作成ということでいただいておりますので、私どもでこれまで埼玉県で取り組んできたことを資料としてまとめてみました。各6つの分野がありますので、まず私から資料を分野ごとに非常に簡単に説明させていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

まずお手元の資料1ページをおめくりいただいて、これが最初の「教育に関する3つの達成目標」についての分野でございます。こちらのページは「3つの達成目標」の全体像のところでございます。下段にありますように、特徴として、数値評価、5段階別評価を行っていることがあります。

次に2ページですが、これは「徳」における取組でございます。県独自の道徳教材の活用や道徳事業、「匠の技伝承授業」などに取り組んでおります。

3ページですが、こちらは「徳」における現状になります。「規律ある態度」につきまし

て、各学年、下段にある12項目ですが、これを調査しまして、子供たちの8割以上が「よくできる」または「大体できる」、要するに「できる」という回答をした項目が、全体でいうと小学校でいうと72、中学校でいうと36の中でどれだけできているかというところを示したグラフです。現状を見ますと、小中学校全体で一定程度規律ある態度が身に付いたということがわかります。

次に4ページになります。学校別のスマートフォン所持の現状とこれまでの対策についてまとめたものでございます。特に埼玉県青少年健全育成条例の改正におきまして、スマートフォンによる有害情報の閲覧制限のためのフィルタリング対策を実施いたしました。利用方法や危険性を学校、家庭で学ばせることが重要でございます。

次に5ページです。こちらは「体」における現状です。小中学校の新体力テストの上位結果の推移を表したグラフになります。小中学校ともに体力は上昇傾向にございます。全国でもトップレベルです。

次の6ページですが、こちらは「体」における埼玉県の課題です。課題は2点あります。ボール投げと握力であります。全国平均と比較した指標です。特に小学校5年男子のボール投げは数値的には低い数値になっておりまして、引き続き指導に取り組んでまいります。

次に7ページですが、こちらは握力の結果です。小学校5年生、中学校2年生の結果の推移を全国平均と比較したものであります。こちらも小5、中2ともに握力の結果は横ばいの状況でございます。

次に8ページですが、こちらは「知」における現状です。小1から中3まで実施しております「3つの達成目標」の読む、書く、計算のペーパーテストの平均正答率を示しております。現状からは一定程度基礎的、基本的な知識は身に付いているといえます。

続いて9ページになります。こちらは全国の学力・学習状況調査の全国順位で、小学校6年生のものです。「3つの達成目標」で基礎学力の高い定着があったのですが、全国学力・学習状況調査では全国の中位レベルになっております。

続いて10ページです。こちらは中学校3年生の状況です。こちらも同じく「3つの達成目標」で基礎能力のほうは高い定着があったにもかかわらず、全国の学力・学習状況調査では中位レベルになっております。

そこでこれらの課題を見据えまして、「知」における取組として、今年度、平成27年度から埼玉県版の学力・学習状況調査を小学校4年生以上で実施しております。ポイントといたしましては、この埼玉県の学力・学習状況調査は一人ひとり全員の、学力を確実に伸

ばすための取組で、テストの実施方法も全国初の取組となっております。一人ひとりの学力の追跡調査をしながら伸びを見ていこうというものです。特長としましては、早い時期から課題や伸ばすべき点を明らかにできること、経年変化を把握できること、そして、これらの結果を踏まえて一人ひとりの全員の確かな学力の育成につなげられる、ということでもあります。

ここまでが6つの分野別の1つ目の「教育に関する3つの達成目標」についてでございます。

○上田知事 今、教育長から簡単な報告がありました。

私のほうから、基本的には「3つの達成目標」を丁寧にやってきた結果がモラル面で高い評価を受けているようなところがあります。文部科学省が学力検査をやっているのですが、3年に1回はいわゆる社会規範の部分で46項目ですか、いろいろ調査をしていて、過去3回やっているのですけれども、埼玉県は16位、それから、7位、4位と上がってきていまして、上位の3県はローカルな県ですし、大都市圏は軒並みに最下位に近いところにいます。首都圏では、例えば東京都が20位ぐらいで、愛知県が28位だったかな、神奈川県とかが38位かな、他県は出てないね。いわゆる大都市圏というのは軒並み不振で、人口の多い埼玉県が『『いい子供が育つ』都道府県ランキング』という数字で文科省の調査を分析した研究所が発表しているのですが、東京が20位、千葉が24位、愛知が28位、神奈川が38位ということで、下位のほうに大阪や北海道や福岡といった人口の多い500万以上の都市圏がありますが、ちょっと特筆して埼玉県だけが4位にいるという感じです。ちなみに上位3県は秋田、宮崎、山梨というところでございます。直近の一番2013年度の部分では、2010年では宮崎、秋田、山梨、栃木、鹿児島、山口がありまして、比較的ローカルなところが順位が高いですので、こういう社会規範というところなんかでは相当埼玉県の規律ある態度の部分での運動だとか、あるいはその他のいろんな見守り活動だとか、実行なんかのいろんなものがある影響を与えている気がします。学力面が全国中位ですので、この辺が課題だということで、新しく埼玉県単独の調査なんかを行って、丁寧に、どこに課題があるかということをやっていこうということを取り組んでいただいているところでございます。

この分野に関して御意見がございましたらどうぞ。

○志賀委員 やはりかねてから知事がおっしゃっていらっしゃる、一人ひとりの人材を活かそうというような話をされておりましたね。先ほどのお話にもありましたように、誰もが

活かされたいと思っている、そういった人たちが子供を育てていくことに携わっていくという面では、非常に埼玉県を取組では、学校応援団という取組もございますよね、そうした家庭と地域の連携ですとか、学校とか地域の3つの3本柱で子育てをしていく、そういった取組が、子供たちを育てるという部分もあるのかなと思っています。

特に「徳」、道徳観念といいますか、そういったことにやはり子供たちの「徳」が育つとやはり勉強も頑張ろう、「知」のほうも、体力的にもすべてつながってくると考えておまして、常に挨拶をする、相手に感謝をする、そういったことというのは、やはり周りの大人が教えていくという必要があると思っています。

やはりおかげさまでこの世に生かしてもらっている、学ばせてもらっている、そういった心を育てることが全てにつながってくるのかなと考えます。

ですから、埼玉のこういったモラルが順位が上がってきているというのは、もうすべての心の成長というものが非常に大きな影響があるのかなというふうに感じます。

○上田知事 ありがとうございます。

他の委員何かありますか。

○門井委員 前回でも話をしましたが、学力面では若干伸び悩んでいるところがあるのですけれども、特にモラルのところは非常に伸びてきていますので、恐らくそれにつられて学力のほうも、生徒一人ひとりのモラルが高まれば追い付いてきますし、本来の勉強の環境も整ってくると思っています。今年から新たな学力・学習状況調査も取り入れたので、これから埼玉は非常に伸び盛りになる県だということで、方向性は非常にいい方向に向かっていると私は理解をしております。教育委員としてもこういう方向を大事にして盛りたてていきたいと思えます。

○上田知事 学力が高いに越したことはないのですが、経年変化で例えば20点の人が40点になったら倍増しているわけですね。それはそれですごいことなんですよ。その凄さというのを確認できるようなことが認めることになるのではないかなと私は思っています。

では落ちたから悪いかという、そんなこともないです。たまたまうっかりミスがあったから落ちたとか、そういう形でなぐさめることも可能だし、良くなったことはどんどん褒めて、たまたま落ちても、いや、それは得意な問題がたまたま出なかったからとかと言ったり、たまたまミスがあったからとか、よく中身を見ていけば、どこか励ますところの内容なんかはあると思うのです。そういう指導を現場でしていただければ、丁寧な学習状

況、点数を出すのではなくて学習状況を見る、そういう意識を現場の先生方に持っていたければありがたいなと思っています。点数を出すというよりか。

○吉田委員 規範意識とか、規律とかいったところが順位が高くなったという、何を現場でどういうことを特に配慮した結果そうなったのかというようなことがあると思うのですね。ただ、今、世の中の社会の流れとして、いわゆる朝のラッシュの中の様子なんか見ておりましたが、満員電車の中でリュックを背負って、ひたすらスマートフォンをやって、あんな姿を見ていると、もう個人主義の「個」から、孤立のほうの「孤」に人間関係とかそういったことがずっと移っているような、そんなことすら考えてしまうような状況で、全体がそういうふうになっている中で、順位も確かに大事なんだけど、そこの中で例えば本当に自分と同じ大事な存在であるあなたという人が周りにいるのだという、その辺のところをどう本当の思いやりとか、そういったところを学校教育、あるいは家庭教育の中で育てていくのかという事もこれからは大事になってくるのかなと思うのですけれども。

○上田知事 そうですね。友達がいないので麻雀ができないのだそうです。友達が3人いない。1人ぐらいしかいない、極論すると。1人でゲームできるから。複数でゲームをやる、例えば将棋にしても碁にしても相手がいるわけですね。あるいは麻雀だったら3人相手がないとメンバーが揃わないとできない。今、麻雀屋が成立しない、若い人のための麻雀屋、友達が3人いない。ゲーム機が友達だと揶揄されるぐらいなんですけど、まだ集団の様々な遊びや学びの空間をたくさん作らないとピンチですね。

ただ、そういうことも含めると、46の設問の中には、生活習慣が4問、意思とか人格が5問、家庭での生活が3問、道徳規範が5問、地域に係る見守り活動だとか、そういうのを含めたのが5問、テレビゲームやメールが4問、実はこのメール等のいわゆるスマートフォンや携帯なんかは埼玉県ブロック度が高いのです。全国平均に比べて。趣旨を徹底したために。事業所などにずっと立ち入りを何回もやって、やっていることはやっているのですね、協定上は。実際やはり個別の店舗に行くとかやってないわけですね。エログロ、ナンセンスにアクセスができるわけですね、小中学生、ブロックしてないのですね。購入する時、親が購入していますので。その時にブロックさせていけば問題ないのですが、しなかったのを徹底してやらせるということで、ブロック度がすごく埼玉の場合高かったので、こういうテレビゲームやメールなんかでは高い点を取ったりしておりますね。いずれにしてもコミュニケーション能力とか、学習意欲だとか、いろんなものの分野でそこそこの成果を出しているのです、埼玉県が都市部においては16位、7位、4位というふうに、

ある意味ではちょっと考えられないような数字で、携帯なんかも、フィルタリングの率なんか、全国と比べると本当に高いのですね。そういうのが成果が出ていると思っています。『いい子どもが育つ』都道府県ランキング』の分析を丁寧にしたら、何がまだ十分ではないかというのなんかがわかってきていますので、これは分析の価値があるのではないかと考えています。

具体的に関連してどうですか。

○高木委員長 教育委員として学校訪問をたくさんさせていただいたのですけれども、すごく子供たちの挨拶が元気なんです。すべての学校を回っているわけではないのですけれども、いろいろな中学校も含めて行かせていただいたのですが、とても元気がよくて挨拶がよいのです。

ですから、先ほどの川野会長の話ではないのですけれども、やはり挨拶が基本だと思っていて、埼玉の子供たちは挨拶がよいので、先ほどこういった結果の数字が上がっているのも、挨拶から始まっているのかなという気がしています。これからもたくさんの訪問を我々はする予定になっていますので、そこを考えると、まだまだ将来明るいぞというか、今は決して暗いと思いませんけれども、みんなの子供たちの元気な挨拶から始まって、思いやりに発展させたいですね。先ほど吉田委員のおっしゃったような、孤立しないような子供たちが育っていただけるといように期待をしています。

○上田知事 でも麻雀屋が成立しないというのなかなかつらいところですね。友達が少ないのではないかという傾向が。

○藤崎委員 視察させていただいて感じることは、学校の掃除、生徒たちがきちんと取り組んでいる、例えばもちろん勉強ができたり、テストの成績がいいということも大切ですが、自分たちが使っている学校のトイレから何から何まできちんと掃除をしているということはとても誇るべきだなと思いました。

以上です。

○上田知事 やはり規律ある態度などの成果というのは出ているわけですね。

○関根教育長 はい、小中学校で「3つの達成目標」を始めて、学校からも「3つの達成目標」を是非続けてほしいと言われていています。規律ある態度について県として基準を設けて、一つの物差しとなっているので、学校も取り組みやすいということはよく聞いています。あくまで数字は一つの物差しですが、物差しがあるおかげで我々としてもわかるということがあります。

○上田知事 メルクマールというか、何かがないとやりづらいですね。

○関根教育長 これだけではないですけども、これが一つの物差しとなって評価できるという点では、学校としてはやりやすいということは伺います。ただし、どの学校でもこうした物差しがなくてもきちんと思いやりとかを育てなければいけないということも考えてやっています。私も、こうした物差しがあるとより伸び率が見えてくるという意味ではいいと思いますが、これが全てではないので、一つの物差しだということで考えております。

○上田知事 数字は嘘はつかないけれども全てを表わしていない。

○吉田委員 学校訪問でトイレを注意して見るのですけれども、今年訪問させていただいたある学校のトイレは、部屋に隣接しているところにあるにも関わらず、全く匂いもしないし、もちろん綺麗にしてある。そういったことを特に気をかけてやっておられる校長先生のリーダーシップ、その熱い想いみたいなものを感じて、ああ、こういった本当にベースのところから教育というのが立ち上がってくるのだなということをつくづく感じたのですね。

ですから、先ほど知事もおっしゃいましたけれども、そういったまず「徳」といったところがきっとベースになって、ちょっと遅れるかもしれないけれども、必ずや「知」はついてくるのだ。何か手を打てば。そんなふうに思います。

○上田知事 私もそう思っています。

では第1分野のほうはとりあえずは御理解をいただいたということで、第2分野について教育長、引き続きお願いします。

○関根教育長 それでは、12ページから生徒指導・体験活動について御説明いたします。

12ページですが、これはこれまでの不登校対策の全体像であります。下段にありますように、不登校・いじめ対策の活動ということで様々な取組を行っております。

13ページは、これまでの中途退学対策の全体像であります。こちらも下段にありますような様々な取組を行っております。

14ページは、さまざまな体験活動の実施状況の資料でございます。学校ファーム、それから、交流体験、社会奉仕体験の様々な体験活動を行っております。

次に15ページですが、こちらは学校活動として被災地ボランティアに参加した高校生の生徒数です。被災地ボランティアの参加実施校の学校数は少しずつ増えてきております。ただ、平成26年度は貸し切りバスの料金が値上げされたものですから、バスの台数が減

となって、参加生徒数が減少しております。

続きまして、16ページ、17ページは、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー及び相談員に関する資料でございます。17ページですが、こちらはスクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの配置による成功例を示したものでございます。医療的対応が必要であったり、福祉分野の支援が必要なケースについて教員がスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった専門家とチームで対応するとともに、状況が改善されている例を例示してございます。

続きまして18ページは、これはスクールソーシャルワーカーの人数です。そして小中学校の児童生徒の不登校の数、それから、中学校に配置している相談員への相談件数を示した図であります。灰色の薄い色ですが、この棒グラフがスクールソーシャルワーカーの数でございます。設置市町が年々増加しております。すると反比例するように黒色の折れ線グラフの不登校児童生徒の減少です。それから、黒の棒グラフですが、こちらは中学校配置の相談員への相談件数の棒グラフでありまして、23年度以降は6000件を下回っております。

続きまして19ページですが、これはスクールカウンセラー配置後の平成18年度以降の小中学校の児童生徒の不登校数の推移でございます。平成17年度からスクールカウンセラーを中学校全校に配置しています。不登校児童生徒数は年々減少傾向にございます。

次の20ページでは、これは小1問題の対応の非常勤講師の配置状況とその成果でございます。配置校数は平成20年度から増加しまして、140校程度で推移しております。配置した学校においては、課題のある児童につきまして一定の改善が見られました。

ここまでが生徒指導・体験学習でございます。

○上田知事 ありがとうございます。

いわゆる中途退学や不登校対策というのが順調に成果を出してきたという傾向が見られております。これの中で御意見は。

○高木委員長 実は昨日、一昨日と広島県で行われました全国教育委員長協議会に参加してきて、子供の貧困対策の分科会に出てきたのですけれども、その中でスクールソーシャルワーカーの役割について、各都道府県のいろんな意見が出ていまして、埼玉県も、非常にずば抜けた数のスクールソーシャルワーカーの設置数です。他県でも、不登校であったり、それから先にある貧困問題とか、かなり悩んでいるところが多いようでありまして、そういった意味では、埼玉県は非常に手厚く対策を、スクールソーシャルワーカーを入れ

ることによってなるべく未然にそういった部分を防いでいこうという姿勢が感じられました。今までどうしても県の中でしかものを見る機会が少なかったものですから、全国的に考えると、その辺のところは非常に埼玉県は進んでいるのだなと思ったわけであり
ます。

ただ、1点だけ、やはりスクールソーシャルワーカーの数が増えれば費用も掛かるわけ
でありまして、その辺が今後課題として考えなければいけないのかなと感じております。

○上田知事 一般的に言うと、都市化が進めば進むほど、大都市圏になればなるほど犯罪
が増えて教育が悪くなるという傾向があることは事実ですよね。したがって、アメリカの
東西の両ニューヨーク州の知事だ、市長だ、あるいはカリフォルニア州知事とか、ロサン
ゼルス市長さんだとか、そういう人たちは、寄ると触ると治安の回復とか、教育の再生
とか、家族の絆とか、そういう話ばかりしているわけですね。中西部の知事や市長さんた
ちは、ジョブ、ジョブ、雇用、仕事だ、仕事だ、産業を興せとか一生懸命言っているわけ
ですね。そういうことでいえば、埼玉県は確かその中で一般的に言うと、中途退学が増え
てきていた、それから、不登校が増えてきていた。趨勢としてはそうだった。それが18
年ぐらいから逆に良くなってきているというような、明確にこの問題を意識して、対策を
とってきた答えが出てきているのかな。当時、平成18年レベルで中学生の不登校の出現
率が全国ワースト8、25年レベルでベスト8まで上がってきていますね。高校の中退率
も平成16年当時でワースト2、出現率の数の多さでは46位、下から数えて2番目、た
だ、何か統計方法が変わったので一気に12位まで上がったというきらいもあると思いま
すが、全体としてはずっと上がる傾向を見せている。つまり問題を解決しつつある。

この部分で何が原因だということを決定的に決めるのは難しく、複合ですね当然。い
ろんな政策の組み合わせですね。この辺で教育長、教育委員会的な事務レベルでの総括と
いうのはどんなふうになっているのでしょうか。近年の問題解決の成果という形では。

○関根教育長 基本的にはこれまでやってきたことがこういう数字で表れているのだと思
います。ただ、まだまだ不登校の対策は必要だと思います。埼玉県は確かに順位では上が
っていますが、全国平均に近いですので、もっと上げたいと思っています。

あとはやはり知・徳・体の知の部分について、児童・生徒が学習によって自分に自信を
つけることが加わると良くなってくると思います。そういう全体の取り組み方をしていけ
ればと思っています。

○上田知事 学力日本一の秋田県が不登校の出現率が最も少ないという関連する組み合わ

せがあるので、それを見ると、わかる授業だと、子供が学校に行って、わかれば楽しい、わからないとおもしろくない。それに加えて何かのストレスやいろんなものがあれば不登校になってしまうということもありますので、授業がわかる、勉強がわかるというのはやはり一つの要素だと思いますけれども、学校は基本的に遊びに行くところではなくて勉強するところですから。と思いながらも結構遊んでいたのですが、その辺について御意見は。

○藤崎委員 不登校の数が統計的に減ってきた中で、私が埼玉県で感じたことは、知事はとても数値を大事にしてこられました。これは鳥の目だと思うのです。実は不登校に関して鳥の目をなかなか県全体でやってこられた県は全国的にも少なかったのではないかと思います。例えば埼玉県は市町村すべての不登校の数と、それから、パーセンテージを常に把握してきました。各市町村の不登校の数値を出すことにはためらいがあったりして、このようなことは全国的にも珍しかったのではないかと思います。

私自身、現場の相談員ですと虫の目になってしましまして、藤崎さん、何人を見ているのですかと言われた時に、子供の顔がぱっと目に浮かぶのですけれども、何人というのは即答できない。それから、学校の先生も、おたくの学校には何人いますかと言ったら、あの子とあの子、自分の関わった子供の顔はぱっと浮かぶけれども、他学年になるとわからなくなるとか、そういった中で、県の教育の中できちんと数値を把握してきたというのは、不登校を減らす見えないけれども大きな推進力となったのではないかと思います。

今後なんですけれども、では不登校を減らすために何が重要かといいますと、現場で感じることは、やはり発達障害の子供の早期発見、そして早期治療、早期支援だと思います。後半で出てきますけれども、発達支援マネージャー、発達支援サポーターを今育成しています。これが保育園・幼稚園だけでなく、小・中・高というふうに広がっていくことが重要だと思います。また今の保育園、幼稚園での取組がこれから先だんだん生きてくるのではないかと期待しています。発達障害の子供の支援が充実すれば、今の不登校の数を半減できると思います。継続して力を入れていくべきではないかと考えます。

あと先ほど高木委員長がおっしゃったように、スクールソーシャルワーカーをいち早く入れるということも、経済的な問題などがありますので、現場の先生方にも力になることだと思います。ただ、実は一つ課題として、どんなにいいスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーが奮闘したとしても、学校の先生との連携がうまくいっていない学校では、それがなかなか相乗効果となってあらわれなくて、一人ひとり子供を助けようとしているのだけれども、それが結果につながらないという中で、やはり教員がコーディネ

一時的な役割をきちんと持って、外部の人材を結び付けていく力を、埼玉県ではもっと先進的な試みとして充実させていく必要があると思います。実際、この前、岩手の事件がありました。どんなにいろいろな制度や、あるいはスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーがいたとしても、担任との連携ができていなければ、子供を救うことができないわけです。また、現実としていまだにいじめられた子供は学校に行けなくなって、適応指導教室や、フリースクール、あるいは家庭にそのまま留まっているという現状が多かったりします。いじめられた子供の不登校で問題が収まってしまうと、加害者であったいじめた子供への教育の機会が永遠に失われてしまいます。いじめに対するぶれない指導が大切だと思います。

○上田知事 教育長は、学校長、また教師の経験がおありになるのですが、例えば高校を中退する子供もシグナルがありますね。学校に出てこなくなる、まずは。そういう時に、担任の先生なんかは包括的な指導力があればいいですが、たまたま余りそういう意味でのパワーがない方だった時に、校長、教頭、あるいはそういったことの得意な先生などが助っ人で代わりに、場合によっては担任の先生と一緒にとか、代わりにとかで、その子供の家なんかを訪ねたりするような、そういう協力関係というのは学校内にあるのでしょうか、現場的に。

○関根教育長 基本的にはあります。例えば高校ですと、教育相談の部門というか部署の中にあると思いますが、委員会だったり、分掌だったりします。問題が起こった時に、担任1人ではなくて、まず学年団で共有する。その上で同時に相談に乗る機会を与え、例えば教育相談の委員会の中にはそういう専門の方々が必要いらっしゃいますので、そういうところで必ず共有して対応する。場合によっては管理職、特に教頭がよく対応します。私の教頭時代にはかなり家庭訪問を行いました。

○上田知事 そういうのは自然体で大体できているのですか。それともできるところはできているけれども、何となく担任の反応とかが弱かったり、あるいはリーダーシップが弱いと、それきりになって、いつの間にか辞めちゃったとか、そうなりやすいですね。

○関根教育長 教育相談の部門というのはありますので、担任がその問題を学年なり、教育相談の部門に上げていかないとなかなか厳しいところがあります。

○上田知事 そうですね。

○関根教育長 その辺の動きが悪いと問題が出てくると思います。

○上田知事 3日ぐらいだったら戻りやすいのですけれども、2週間ぐらい休んだりする

と戻りにくくなるとかあるのですよね。時間的な制限というのが。

○関根教育長 高校の場合ですと教科担任制ですから、他の先生方も生徒が休んでいればわかりますから、関係性があれば担任以外でも生徒の様子が見えてくるはずですよ。そうした関係性を校内で作っていくということが管理職の一つの仕事です。管理職が目や鼻を光らせているとか、気にしているかどうかというのが大きいんです。管理職が全部見ているわけではないのですけれども、そういうことを大事にしている管理職であれば必ず情報が複数のところから上がってくるわけですよ。そういう点で一番厳しいのは小学校なんです。小学校は担任制で、担任が全くそういう情報を出さないと、なかなかわからないということがあると思うんです。しかし、小学校の校長先生、管理職の場合はそういうことも知っていますので、意識的にいろいろ校内を歩くということはやっております。

○上田知事 得意・不得意がありますよね、人間ですから。教科を教えるのは上手くても人間学を教えるのは下手とか、逆に教科はいまいちだけれども、人間学はいいとか、そういうことの役割分担みたいな形がさっとフォーメーションでできれば相当課題を解決できると思うのですが。一方では例えばこういう話も聞くことがあるのですけれども、本当かどうかわかりません。教師の集団は、もう教師の集団に任せてくれ、教頭や校長は、学校を代表してPTAだとか、そんなところにちゃんと当たれば、教科内容とか教育の内容に関しては何も言わない、そういう世界もあるというようなことを聞いたりするのですけれども、この辺なんかどうなんですか。実際のところは。

○関根教育長 高校の場合は、確かに教科のことは教科が中心になって動いていますが、私も浦高の校長の時に教科内容も見っていました。特に私は数学でしたから、数学以外のことはよくわかりませんが、教科で決めたことが必ず全部よいとは限らないので、校長のほうもリーダーシップをとって、動くか動かないかでかなり違います。どの学校の校長も、教員の評価を行いますので、教員全員の授業を見ている。指導法についても、共有していかないと、学校として力が伸びていきません。個人個人に任せていたのでは、学校としての力が上がっていかない。今はそうした面で学校の評価を行いますので、校長とすると、そうした部分に踏み込んでいく必要があります。個人の主体性、先ほど川野会長が言われた教員の主体性というのはすごく大事です。主体性を大事にしなければいけないのですけれども、勝手にやらせておけばいいというのは問題です。やはり管理職として見るべきはちゃんと見て、アドバイスできることはアドバイスする。指導するというのをやらないといけません。

○上田知事 学校全体、校長以下みんなでチームになってもらいたいですね。ちょっとなまけ心で休んでいるような子供であれば、説得するのに手間暇かからないと思いますね。通常の実力の担任とかで十分間に合うと思うのですが、家庭内が複雑なものだとか、なかなか困難な状況なんかというのは、生半可な人だとなかなか難しいですよ。相当の人が行って口説いたり、あるいは何らかの形をとっていかないと難しいので、これは担任だからという形で任せきりとかといたら、多分そういう中途退学にしても、不登校にしても、半分ぐらいは簡単な話なので、とにかく家庭訪問して、しっかり親を口説き、本人を口説いて、なおかつ隣近所の友達に誘わせれば半分解決すると思うのですが、半分の人たちはやはりいろいろ課題があるのですよね。家庭内とかに。親にも問題があったりして。そういうのは幾つか糸をほぐさなくてはいけない。それには相当力のある先生でないと難しいので、そういうのが助っ人できるようなフォーメーションというのでしょうか、そういうのを是非、現場で作ってもらいたいなと思っていますね。そうすると格段に成果が出てくるのではないかと思います。

○関根教育長 例えば夜間の定時制などを見ていると、家庭の問題というのは福祉に関わるようなものが多いですね。そうすると教員だけでは無理ですね。やはりスクールソーシャルワーカーとか専門的な方に入っていただいたりして、福祉事務所と連携したりすることも必要になってきます。

また、発達障害とか、病気とも関わってくると、スクールカウンセラー的な臨床がわかる方がいらないと、教員だけではカバーしきれない問題も出てきます。そういった点で国も今、「チーム学校」という形で動いていますけれども、知事が言われるように、チームとして教員の中で、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどとの連携をどうやっていくのかということが重要です。この連携については、管理職の意識によって随分違いますので、その辺の対応を管理職にはきちんとやっていただきたいなと思っています。

○上田知事 ありがとうございます。

時間がまいりました。今日は川野ヤオコー会長から、志の高い企業理念とか、商いのコンセプトをはっきりさせるとか、そういった部分は、多分志の高い学校教育とは何なんだとか、高校教育は何なんだとか、あるいは各分野ごとの課題を解決するコンセプトは何なのかとか、そういったものに通用するものをたくさん伺えたと思います。最終的にまさに埼玉県として志の高い教育理念とは何なんだ、それから、それを実現するコンセプトは一

体何なのだという事を最終的に持っていくことが大事だと私は思っております。それにしても現実には、これまでのやってきたことの成果とか、あるいは課題というものを整理して、これを加味した形の中でやらないと、まさしく何の経過もない中に一つでもぽんと何かが出てくるわけでもありませんので、着実に各分野ごとのこれまでの成果や課題を一旦復習してというか、もう1回学び直して、最終的に埼玉県教育の針路というものを作りたいと思っておりますので、今日はとりあえず第2分野まで意見交換ができたと総括して終了させていただきたいと思っております。

今日はありがとうございました。

○関根教育長 それでは、以上をもちまして第2回埼玉県総合教育会議を閉会といたします。

ありがとうございました。

閉 会